

絵図から みえることなど



さ さ き としかず
佐々木 利和

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授
1948年北海道生まれ
1979年法政大学大学院修士課程修了。博士(文学)
東京国立博物館を経て、
文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官
2006年より現職

国絵図とは

先日、連盟の工房にお邪魔して、宮城県立図書館所蔵の旧伊達家蔵国絵図の修理過程を拝見してまいりました。伊達家の地図のひとつの特色はきわめて大きいことです。大きな地図をいかに修理するか、大変興味深いものがあります。

国絵図というのは、日本の六十余州、たとえば、山城や摂津、和泉、河内といった国々の地図です。豊臣秀吉が検地後に地図の製作を命じたことがありますが、基本的には江戸幕府が大名たちに命じて、自分の領域の地図を作製させます。摂津や河内ですと片桐且元が担当したといった話があります。日本の国土を把握する(つまりは石高確定の)ために地図をつくることは、為政者であればごく当たり前のことです。

古くは奈良時代に行基が製作したと伝えられる『日本国総図』(俗に「行基図」といっています)は、卵を連ねたような地図ですが、なぜかうまく日本列島の形を表しているような感じさえします。それが奈良時代に製作されたかどうかはともかくとして、日本の形をつかまえることができたもっとも早い時期の地図です。

国絵図にかえります。当然のことながら、国持ち大名、たとえば島津や前田、伊達などは一國(あるいはそれ以上)を領しているため製作は楽ですが、ひとつの国に複数の大名がいる場合や、高山があったり境界が入り組んでいたりと国境の確定は容易ではありません。幕府が強権をもって地図の製作を命じたゆえんです。

最初に製作されたのが慶長九年(1604)ですが、その地図はほとんど残っていません。その後、幕府は3度(正保、元禄、天保の各期に)国絵図製作を命じています。『天保の国絵図』は83舗全部が残っており、重要文化財に指定されて国立公文書館に収蔵されています。また、『元禄国絵図』として幕府に上呈された地図は8舗ほどしか残存していませんが、これも公文書館にありま

す。それ以外は控え図として各藩に残されていました。

陸奥の国は、南から伊達藩領、次いで南部藩領、津軽藩領と分かれていますが、元禄には伊達家、南部家、津軽家それぞれで地図を製作しています。そのうち南部家の地図は控え図ですが、きわめて状態がよいものです。そこには幕府の指定どおりの制作法で、道路をつけ、河川と城郭を入れ、各郡ごとに村々の石高等を指示しています。

この地図づくりでもっとも問題になるのは、北の南部藩領と仙台藩領の国境、西は山形藩領と秋田藩領との国境です。国境については幕府もかなり注意をしており、国境は各藩で相協議して定めなさいとしています。南部藩と仙台藩と話し合っ国境(ほとんどは山の形)を確定していますが、それを国境の絵図(縁絵図、際絵図)に作成して残しています。仙台藩領の地図は、仙台藩からみた山の形が、南部藩領では南部藩領からみた山の形が描いてあります。

ちなみに、国境の問題は現在に至るまで続いています。たとえば、最近確定したのかどうか分かりませんが、富士山の山頂が山梨県側か静岡県側かかなり議論になっていました。国土地理院の地図をみても山頂の県境は確定されていませんでしたが……。

それに関しておもしろいのは宇和島藩です。宇和島藩の伊達家と、その支藩で後に宇和島藩に吸収される吉田藩とのあいだで両藩の境界論争がありました。そこで、吉田藩ではその境領域の精巧な山岳模型(「目黒山形」という)を製作し、江戸にもってきて、江戸幕府にこっち側が宇和島藩領、こっちがうちの藩領だという訴訟を起こすのに使っています。これは現在も松野町の建徳寺に残されています。

また、随分前に指定された紙の模型地図が毛利家に残されています。「土図」といっていますが、土の上に紙を張ったような郡ごとに分割される地図です。

このように、国境を確定するのは大変な仕事でしたが、そのわりに際絵図はあまり残っていません。

伊達家には、元禄の国絵図に関して際絵図が、山の形に切り抜いた切り図のかたちで残されています。元禄の国絵図で国境の地図が残っているのは、伊達家の史料を除けば長門と周防、つまり毛利家でもっている地図と、豊前の地図くらいです。その意味ではきわめて重要な資料です。

国絵図の畳み方

伊達家の元禄国絵図は短辺が3m、長辺が6mと巨大です。それが宮城県立図書館に修理後に返却された場合、どこで閲覧するかという大きな問題がでると思います。6mもあるため、壁に下げるにもそれ以上の天井高がないと無理です。しかもその場合は地図の上部はみることができません。どうしても床の上に広げてみるしかない。地図独特の畳み方が発達するゆえんです。

しかし、その国絵図は伝世しているあいだに畳み方がかわって、長辺方向で折り畳んで短辺方向に開くようになっていました。そのため、小さく折り畳まれている段階では1人で開けますが、長辺方向に開いた段階で、さらに開くためには4人は必要となります。また最初の折を押さえる人間が必要ですから、つごう最低でも6人ほどいないと開けません。

ところが、さすがに専門家の目はすごいと思ったのですが、修理の過程で古い折り跡を見つけていただきました。その古い折り跡では、縦に折るのではなく、短辺を中心として畳んでいました。大きさはほとんど同じですが、畳み方が現状とはかなり違います。

もうひとつ、自分のみたく場所、たとえば仙台北下の様子をみたくとき、長辺方向だと6人の手を借りなければ開けませんが、古い折り方だと1人で開けます。私も地図を扱っている者にとって、古い折り方が一番よいことはよく理解していますが、実際に修理の場で大きな地図を手にとられながら、それを見つけたプロの目にはつくづくと感心させられました。

基本的に地図は、古い折り方に沿って開けていけば

ごく自然に開きます。

ちなみに、私が昔、東京国立博物館(以下「東博」と略す)にいたころのことです。

よくあちこちでいうのですが、あるきわめて高名な先生が地図をご覧にこられました。こられた瞬間から、俺は偉いからお前らは資料をみせて当然なんだという態度で、「地図をだせ」とおっしゃいました。偉い先生ですからださないわけにいきませんが、念のため、「地図、お扱いになれますよね」と伺いましたら、「誰に物をいつているんだ」ということでした。そこでおだしたのですが、返されたとき、厚さが倍以上になっていました。つまり、開くことはできたのですが元に戻すことができなかつたのです。いささか以上に落胆すると同時に、大学の先生ってこんなレベルかと、きわめて腹が立ちました。ひと言、「手伝え」とおっしゃっていただければ、ご協力したのに、です。それ以来、私は偉い先生というのは信用しないことにしています。

地図は自然に開けば、ごく自然に自分のみたいところをみることができますが、その扱いを間違えると收拾がつかなくなります。收拾がつかなくなって無理をすると、先ほどの偉いひとようになります。

6人で地図を扱うよりは少数で扱うほうが楽ですし、安全を考えれば、ごく気の合った1人が2人、せいぜい3人ぐらいでやるのが一番いい。ところが修理をしたがために使いにくくなった例はいくつもあります。それはそれとして、修理の場合、物の安全のためには、安全に扱えるような形態にさせていただくことが大事です。仙台領の国絵図はきわめて大きいため、それを扱うのに確実な技術や方法を考えていかなければいけません。

大きな国絵図の閲覧法

宮城県立図書館の国絵図資料には付属文書類もそろっています。縁絵図と国図の本図がそろっている例は、前述のように、周防、長門、豊前ですが、元禄のころの文書までそろっている例はそうはありません。こ

この国絵図と関係資料はそのくらい優れたものなので、これら国絵図は、宮城県の費用で修復されていることで大変ありがたく思っています。

修理後の地図を、閲覧にどう対応するかという問題があります。この点は、ご所蔵の方に深く考えていただく必要があります。3 m ほどの地図だとテーブルの上でみることができますし、畳み方によっては自分のみたくところをみることができますが、それ以上のものになるとそうはいきません。地図をうまく見せる方法も考えていく必要があります。

仙台藩領の国絵図では、真ん中よりやや東沿いに仙台の町の様子を仙台城を中心にして描かれています。その中心に立って全体を見渡すことができたのは仙台の殿様だけです。それ以外は地図の上に上がることはできません。伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』が江戸城で將軍にお披露目されたとき、將軍がその上に上がって、「これがわが国か」といったという伝説もありますが、そのようなことができるのは権力者だけです。

数年前、東博で東京大学史料編纂所の創立100年を記念して、共同で特別展を開催したとき、史料編纂所が所蔵している国絵図を並べました。琉球国絵図と薩摩・大隅国絵図の出陳でした。

このときは、天保の琉球の地図をケースに入れて並べ、薩摩藩領の地図をデジタル写真に撮ったのを床に張りました。最初、琉球の地図を床に張ろうという話がでましたが、薩摩の地図と琉球の地図を並べた場合、床に張るのは薩摩の地図でなければなりません。その理由は、慶長十四年(1609)に薩摩藩が琉球国に武力侵攻して以降、薩摩の付属国といえれば格好よいですが、実際は薩摩藩の領土としてサトウキビや異国の珍しいものを巻き上げるだけの場になっていたからです。これ以後琉球王国は薩摩藩の大きな迫害にあっています。

琉球の地図と薩摩の地図をだして、一方は床に張ってみると、人情論としては絶対に琉球の地図を床に張るわけにいきません。薩摩の地図を床に張りました。

これは意外と好評でした。その理由は、大きな地図の細部をみることは普通は難しいのですが、自分の知っている地名などを確認するには床に張ってその上にじかに上ってみてもらうのが一番だからです。

その後、米国にある忠敬の関東の『大図』を複写したものを東博の床に張って、その上に自由に乘ってご覧いただいたこともあります。土地勘があると、「ここに俺の家の町内がある」、「このころから俺の町だ」ということになって、非常に親しみをもたれました。

話を戻すと、仙台藩領の国絵図も、宮城県立図書館で一般の県民に閲覧の対応をしたり鑑賞させるとしたら、どうしましょうか。地図の上に大きなアクリル板をのせるのでは費用がかかります。橋などをつくって、その上から自分の足元の地図をみていただくような方法も考えれば、親しまれると思いますが、難しい問題が横たわっているようです。どうか最良の閲覧方法を考えていただければと思います。

伊能忠敬の測量図の発見

私と地図のかかわりあいには意外と古くからです。東博ではずうっと資料部門を担当していました。資料部門は、和書を含む図書と、歴史資料と総括されているものと2つの担当があり、それらは相互に行き来がありませんでした。私は和書の担当だったものですから、歴史資料は簡単にみることはできません。

その歴史資料のなかにずうっと気になっていたものがありました。目録に『九州図』と著録されておりました。それを一度みたいと長いあいだ思っていました。しかし、なかなか担当者とのあいだで時間の調整がつかず、希望がなかったのは随分と年数がたった後です。それは23本の軸になっています。その1本目を開いたとき、驚いたことに、まがうかたなき忠敬の測量図そのものでした。忠敬は文政四年(1821)と文政六年に九州の沿岸測量をしています。東博のその地図は第1次九州測量の地図、すなわち九州のうち、豊前、豊後から日向、

大隅、薩摩と肥後までの6か国分の実測図でした。実際、測点にピンホールがあつたりして、それが忠敬の第1次九州調査の成果であることはすぐわかります。伊能図であることに確信をもち、その部分写真と、忠敬の測量日記のコピーを携えて、伊能忠敬の九州の跡をたどりました。

忠敬の地図の優れたところは、測点がわかることです。たとえば、京都なら京都御所で最初の測点を記して、それから何里かごとに北へ何里、南へ何里と、その方角に沿って測点をたどっていきます。そこがすべて、日記と地図と照合することができます。細かい道筋、道の分かれ、川、橋があるかないか、山の形もどこからみた山の形かがわかるようになっています。そのことが現地について日記と地図と景観とを照らしあわせると、よく納得できました。

このようなすごい地図がさりげなく、単なる九州図として登録しているだけでした。はじめてこの地図を目にしたとき、足が震えるのを感じました。そのときの感動は今でも昨日のこのように覚えています。

東博の伊能図の由来

東博所蔵でよく知られている『伊能図』は、俗に「中図」というものです。日本列島全域を約21万6,000分の1の縮尺で表したもので、それが一番ポピュラーな『伊能図』です。東博のものは原図ではなく、大河内子爵家にあった複製図で、戦後東博に寄贈されたものです。しかし、それにもピンホールがあるため、原図の趣をこんにちに伝える地図であることは間違いありません。その地図(全8舗)が東博に寄贈されたときはとても大きな桐箱にはいっており、8舗を単純に巻いてあるだけでした。それを陳列に使うため修理しました。ただし、修理をした人間は、地図は畳むものだということを理解していませんでした。壁面に展示するのだから、軸にするのが一番よいということで軸状にしようとした。ただし、8本の軸をつくと保管場所に困るの